

2017年度

ダイバーシティサッカー活動報告書



はじめに

ホームレスサッカーから生まれた「ダイバーシティサッカー」を各地に広げます

ビッグイシュー基金では2004年のホームレスワールドカップ（イエーテボリ大会／スウェーデン）出場を皮切りに、ホームレス状態の当事者へサッカーを通じた応援活動をしてきました。路上生活になる過程で人とのつながりや希望を失いホームレスになってしまった当事者に対して、スポーツを通じて身体を動かし心と体のリフレッシュと人とのつながりをつくることを目指したものです。これまでの活動を通じて参加者同士のつながりが生まれ『サッカーで皆に会うことが自分の居場所になっている』という人や、身体と心の元気を取り戻し住む場所や仕事に就く人もいました。そしてもう一つ見逃せないのが、ボランティアで参加してくれる多くの市民が『ホームレスになったのは、その人の自己責任ではないか』、または『かわいそうな人なのではないか』と思いこんでいたことやその価値観が、サッカーの場で会うことで1人ひとりの

名前をもった人になり、互いを応援する仲間になることで大きく変わったことです。

このような活動の積み重ねの上に、2015年からは「ダイバーシティサッカー」として、ホームレスサッカーでの経験を、ホームレスの人だけでなく社会的困難を抱える若者（ひきこもりやうつ病、LGBT、社会的養護の若者など）にも開きました。

ダイバーシティサッカーの最大の特徴は、「人と自分自身を認める」機会を生み出すことで、その場では当事者と支援者という関係はありません。社会の常識や進路の考え方、また、人と違うことで窮屈な思いをしてきた人に対し「ありのままのあなたで良いこと」「他者を比較対象としてみるのではなくそのままの存在として認めること」を言葉だけでなく、サッカーという非言語コミュニケーションを通し、交流型社会空間をつくりながら認め合ってきました。

いま日本には、ひきこもり54万人、若者無業者（ニート）77万人、フリーター152万人など、社会的困難を抱える若者があわせて283万人以上いると言われています。ダイバーシティサッカーの取り組みを全国に広げることで、彼ら彼女らが外に出て他者と関わり多様な価値観を知り、自分の人生をイキイキと生きていくことを後押ししていけたらと考えています。また、ダイバーシティサッカーという取り組みを広めることで、社会の中に様々な人がいて良いし、それらの人々が元気と活力を生み出す多様性のある社会を目指していけたらと思います。

本報告書では、ホームレスサッカーに参

加しているホームレス当事者を中心にダイバーシティサッカーに参加する「ひきこもり」や「福島若者」の話を紹介しています。読み進めて頂くと「ホームレス」や「ひきこもり」といったラベルが剥がれ1人ひとりの多様な顔が見えてくるかと思います。

この活動に参加してみたい、サポーターになってみたいと思った方は、「ダイバーシティサッカー協会」のサポーター（本報告書28ページ参照）になって頂けたら幸いです。

※ダイバーシティ：多様性

NPO法人ビッグイシュー基金
ダイバーシティサッカー コーディネーター
長谷川知広



プログラム紹介

「困った時は相談してね」この言葉はホームレス支援に限らず、家族や友人関係でもよく聞く言葉です。ただ、困っている時に「困っています。助けて下さい」と言うことが難しい人がいるのも事実ではないでしょうか。

そこでダイバーシティサッカーでは、相談窓口に行くのではなく、みんなが楽しめるスポーツを入り口に、人が元気になるきっかけをつくることを目指しました。対象としたのは、ホームレス状態の人や家はあるけれど社会的に孤立しがちな人（ひきこもり、うつ病、依存症など）です。具体的には「スポーツ交流サロン」と「ダイバーシティカップ」を開催しました。

スポーツ交流サロンは当事者と支援者が立場を越えてスポーツを楽しみ、その後にご飯を食べながら対話をする“日常的な集い”の場となりました。ダイバーシティカップは参加者の1年間の目標となる“晴れ舞台”としての大会でした。

1年間の活動を通じて、社会的に孤立していた若者同士が自主的に練習試合をする中で、友人、知人が増え、悩み事や将来の目標を語り合い、周りのメンバーもそのことを応援する、そして大会で再会しお互いの近況を共有するというような姿を見られました。



目次

- P. 2：はじめに
- P. 4：プログラム紹介
- P. 6：サッカーと人との出会いが変えた人生
- P.10：サッカーがつなげた4人の物語
- P.14：多様な形の参加
- P.16：スポーツ交流サロン
- P.18：ダイバーシティカップ4
- P.24：ダイバーシティカップ4参加チームの声
- P.28：「ダイバーシティサッカー協会」サポーター募集と設立沿革
- P.30：おわりに

日常的な集い



晴れ舞台



サッカーと人との出会いが変えた人生

「これまで自分を支えてくれた人、この場にいる皆さんに感謝しています」



この言葉はホームレスワールドカップの元日本代表選手の佐々木善勝さんがダイバーシティカップの閉会式で語った言葉です。佐々木さんは10年前にホームレス状態となり、雑誌『ビッグイシュー日本版※』の販売を始めるとともに、ホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」の活動に参加してきました。現在は堀江車輛電装株式会社（以下、堀江車輛）の清掃の仕事をしています。「皆さんに感謝しています」に込められた思いとは。

佐々木さんは山形県出身の44才。高校を卒業してから自衛隊に4年間在籍した後、地元の建設会社に就職したが不況のあおりをうけて失業。31歳で上京してからは建築現場を渡り歩いたが、「仕事もないし、そんなに人はいない」と働く場所を失いました。



渋谷駅でビッグイシュー誌を販売(2008年)

※『ビッグイシュー日本版』とは、有限会社ビッグイシュー日本が「ホームレスの人々の救済ではなく仕事を提供し、自立を応援する」ことを目的に発行する雑誌です。ホームレスの人に独占的に雑誌販売をしてもらい、その売り上げの50%以上が収入になります。



夜はネットカフェで生活していた頃

ご家族との関係を聞くと「父は大工、母は俺が小学校4年生の時に亡くなった。親父とはずっと関係が悪くて失業し路上生活をはじめ、路上仲間から紹介されたのがビッグイシュー誌の販売の仕事。しかし、「説明を聞いても仕組みがさっぱり理解できなくて…でも、路上での生活は寒さや食べ物など辛いことが多くて試しに販売をやってみた。そしたら“お兄ちゃん頑張ってるね”って温かい言葉を大勢の人が言ってくれてね、その言葉

に励まされて人生捨てたもんじゃないぞ、頑張ろうって思ったんだよね」

雑誌販売の仕事をするようになって変わったことがあるといいます。「人との関わり方かな。それまでは飯場を転々としていつクビになるのかこの人を信じていいのかという不安があった。でも、お客さんは雑誌を買ってくれるだけでなく挨拶や世間話したりね。人を信頼できるようになったかな。それにネットカフェで寝れるようになったしね」



ホームレスワールドカップ・ミラノ大会(2009年)

2009年、佐々木さんはホームレスワールドカップ・ミラノ大会にホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」のメンバーとして参加します。「はじめは気分転換のつもりで練習に参加したんだ。でもね、試合で点を決めると嬉しい。スタッフに勧められてミラノ大会に参加することになったんだ。でも、路上生活をしていからパスポートをとるにも住所はない。それで、1度だけ親父に会いに行つてパスポートをとってね。試合結果はボロボロだったけど色々あったね…(苦笑)」

その後、路上生活から脱した時期もありましたが、就職活動で苦勞をします。「履歴書を出しても書類選考さえも通らない。塾の清掃の仕事の面接にいったらそれも不合格。自分は頑張ってもダメなんだ、就職は諦めようって思ったよ…」

そのことをビッグイシュー基金のスタッフと話をすると、これまでも仕事の中で数字の計算などができずクビになっていたことが分かりました。病院での検査を受けたところ、佐々木さんは知的障がい診断があり、現在の堀江車輛の障



がい者就労で清掃の仕事に就くことになりました。

障がい者就労や堀江車輛での仕事については「障がい者って足や手がない人の事だと思っていたから、知的障害って何だろうって分からなかった。でも、お医者さんと話したら、学生時代や仕事をしてからも、人の話が理解ができずばかり仕事をクビになってしまうことがあった。自分、障がい者なんだって最初はショックだったかな…でも、今は、職場の人が自分の強みも弱みも分かってくれた上で仕事を任せてくれるし頼られていて嬉しいかな」



朝の清掃現場

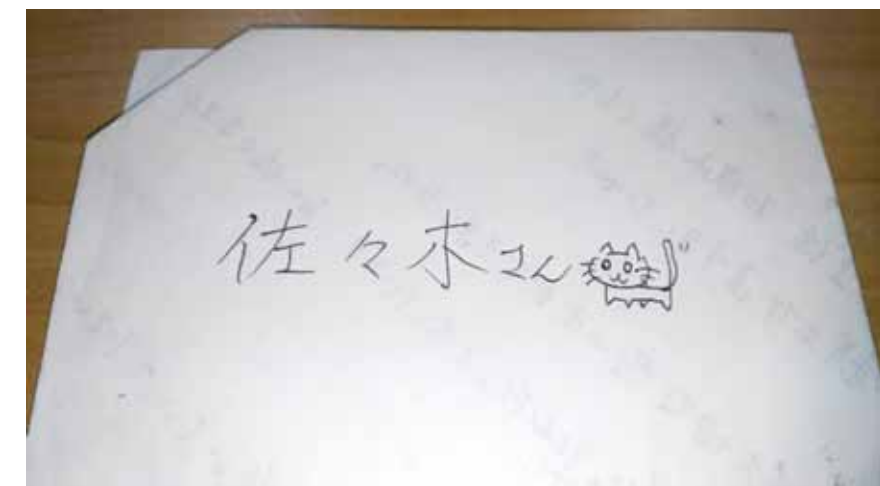
堀江車輛での仕事はビルの清掃。朝は早いし現場も複数掛け持っているので大変だと言いつつ「雨や雪で仕事が大変と思う時はあるよ。でも、路上生活に比べれば全然マシ。帰る家があるし、信頼できる人たちがいるからね」と笑って答えます。

「ダイバーシティカップ4」には、その堀江車輛で働くメンバーとともにチーム



ダイバーシティカップ4(2017年)

を組んで参加し優勝をしました。「これまで一緒にやってきたみんなと別のチームになる寂しさもあったけど、野武士ジャパンのメンバーが応援に来てくれて嬉しかったな。優勝できたのも、仕事しているのも、路上生活を抜けられたのも、やっぱり自分一人の力でなくて、お客さんや野武士メンバー、職場の人のおかげだと思う。だから、みんなに感謝してるよ」



お客さん(ビッグイシュー読者)からの手紙

サッカーが繋がげた4人の物語

今年1年間、サッカーに参加した4人のホームレス当事者の声を紹介します。サッカーを通じて人の温かさに触れ、仲間ができたと言っている人が多くいました。

「自分も、みんなも笑顔になってほしい」

こう語るのは、ホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」のムードメーカーの山下さん。

ホームレス状態から雑誌販売の仕事を経て、現在は警備員の仕事をしながらアパートで生活をしています。

実は山下さん、2017年の春に心臓の手術をしたのですが、退院したその日にホームレスサッカーの練習に（医師の許可のもと）足を運んだことがありました。術後に、何故そこまでの想いが湧いたのか、山下さんはこう語ってくれました。

「野武士ジャパンのメンバーは、自分を含めて過去や体調にいろんなことがあった人が多いんです。でも、練習に行

くとみんな温かい。みんなに会いたかったし、『盛り上げ役』の自分がいたほうがみんなも元気になるだろうって(笑)」

この言葉には、山下さんのこれまでの経験が集約されています。

以前は、失敗や後悔することも多く、他人だけでなく自分自身も信用できなかったそうです。しかし、雑誌の販売を通して多くのお客さんと話す中で、多様な価値観に触れ、自分や他人を受け入れることの大切さを学んだといいます。



「イチ! ニー! サン! シー!」

過去の経験を糧に、人々を笑顔にする山下さんの大きな声が、練習場に響き渡ります。



2017年の書き初め

「自分にとって、ビッグイシューやサッカーが居場所になっている」

伊藤春夫さんは、普段は雑誌販売の仕事をしています。プロレス、野球、サッカーなどのスポーツを見るのが大好き。カメラを向けるとおちゃめな顔をしますが、実は大の人見知り。

サッカーに参加し始めた理由は、「健康のため。それは今も変わらない」とのこと。

「知らない人との交流が楽しいんだよね。人と話がしたいけど人見知りだから自分から話すのは勇気がいる。でも、ボールを蹴りながらの交流なら楽しんでできるからね」と言います。

これまでは、誰かに『応援』されたことがないと語る伊藤さん。父は酒癖が悪く時には包丁をもって暴れることもあり、家は自分の帰る居場所だとは思えなかったといいます。

「雑誌の販売やサッカーの大会で応援されるのはありがたいよね。みんなの『頑



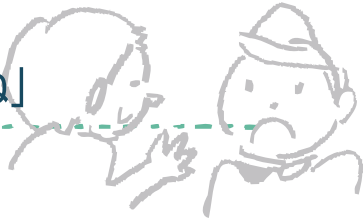
練習の様子

張って』の一言で頑張ろうって思える。それに野武士ジャパンの『みんな』と会えるのが楽しい。ビッグイシューやサッカーが自分にとっての居場所になっているんだよね」



ダイバーシティカップで得意のポーズをしてくれた伊藤さん

「雑談ができる相手がいるっていいね」



花淵さんは宮城県出身で、ホームレス状態の経験者。話し好きで、小さなことにも気を配り、片付けが得意。販売をするビッグイシュー誌は毎号隅から隅まで読み、お客さんに何を聞かれても大丈夫なようにしています。

サッカーでのニックネームは「ぶっちー」。このニックネームは路上生活になる前、自衛隊時代の上司につけてもらった名前なんだそう。

花淵さんは自衛隊やトラック運転手をしてたものの失業し雑誌販売の仕事を開始。2016年、病気をきっかけにアパートに入居。一見、路上生活から脱却し「安定した生活を手に入れた」ように思えますが、住居生活が始まってから“うつ状態”になってしまったといいます。

「1日の生活リズムが変わった。人とも会わなくなって、何もしたくなかった。やる気がなくてテレビをずっと見ているような生活だった」と花淵さんは振り返ります。



ストレッチ中「足が上がらない!!」と笑う花淵さん

「路上生活の時は仲間たち何人かと一緒に寝起きしていたから、みんなの存在も大きかった」とも語ります。

2017年5月にビッグイシュー基金のスタッフと面談し、「気分転換に身体を動かしてみてもは?」と言われサッカーに参加。いきなり運動することに不安があり、まずはドリンクの買い出しや設営、ユニフォーム洗濯等ボランティアとして参加。はじめて参加した練習ではフリースクールに通う子どもと一緒に、「ぶっちーさん。ナイスパス!」といった笑顔のやりとりが見られました。

この日から月2回の練習には毎回参加し、雑誌販売の仕事も再開。今では専用のサッカーシューズも購入しプレーするほどに。

「サッカーでは色々な人と話ができるのが楽しいね。アイスブレイクで“出身県別に集まって!”とかテーマごとにグループを作って話すのも面白いよね。サッカー練習には大人もフリースクールに通う子どもいろんな人がいるしね。相手の話も聞きたいし、自分のことも話したいと思っているよ」

花淵さんが約10か月間サッカーの活動に参加していて感じたこととは。

「毎回違う人が参加するのが良さなんじゃないかな。練習が終わった後に食事をして、交流するのもいい。雑談ができる相手がいるって楽しいね」

「好きなことを仕事にしたい」

ホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」が誇る歩く辞書として有名な中島さん。電車の運賃や発車時刻、全国の名産品など幅広い分野に精通しています。

そんな中島さんの趣味は旅行で知らない土地に行くこと。旅行の際には、いかに安く旅先に行けるかを計画しているそうです。ホームレスサッカーの練習で遠出をする時には、スタッフより率先して中島さんが交通経路と値段を調べてくれます。

「以前は、趣味が旅行だけだったけど、今はサッカーがもう1つの趣味になった」約2年前にサッカーを始めてからは、血圧が下がるなど、大好きな旅行を



チーム紹介を力説する中島さん

するのに欠かせない健康も手に入れました。2017年には貯金を貯めて茨城や沖縄で開かれたフットサル大会にも参加し、日々の生活が充実しているそう。

今後の目標をこう語ります。

「大好きな旅行と豊富な知識を活かせる、旅行会社の添乗員になりたい」

中島さんの長所を活かした就職先が見つかるよう、みんなで応援していきます。



練習前のランニング



多様な形の参加

ホームレスサッカーをきっかけにスタートした「ダイバーシティサッカー」。“ダイバーシティ”という言葉には、参加者の背景が異なっても互いの違いを認めあっていこうという意味を込めています。同時に、サッカーはプレーをするだけでなく、応援する人、支える人がいます。様々な形でダイバーシティサッカーに参加した人の声を紹介します。

西さん（ホームレスダンスチーム「新人Hソケリッサ」メンバー）

今は新宿で寝泊まりをし、新橋でビッグイシュー誌販売をしています。大会では誘導のボランティアをしました。実は前からボランティアをしたいという思いがあったんです。今まで人に応援してもらっているのに、今度は自分も何か力になればと。普段とは違う野武士ジャパンのメンバーの真剣な顔を見られたり、ボランティアの人などいろんな人と話ができて楽しかったです。路上で生活している時とは違う「意味のある1日」だったという感覚がありますね。

怪我しそうなのでプレーはしませんが、また応援とボランティアで参加したいと思います(笑)。



カーソンさん（ボランティア参加者）

2011年にホームレスワールドカップの映画を見てからスポーツを通じた社会的な活動に関わりたいと思っていました。2017年に東京での生活をはじめて練習に参加しました。感動したのは、ホームレスの人でもひきこもりの人もみんな楽しそうにしていたことです。練習で挨拶をすると笑顔で握手をしてくれ、食事の時にはオープンに話をしてくれました。自分も外国人なので、ある意味「日本社会でいえばマイノリティ」なのですが、ダイバーシティサッカーではそうした感

覚はなく“友達ができた”という感じです。妻も練習や大会に誘って参加しています。自分も楽しいし、人のためにもなりとても嬉しいです。



山田さん（元ホームレス当事者）

ダイバーシティカップは、自分のようにホームレスを経験した人や、うつ病やひきこもりの人が集まるととても大事な活動だと思っています。ホームレス状態を経験し70歳を過ぎたおじいちゃんでも、ボランティアとして大会に貢献できたらという想いで会場への誘導をしました。ビッグイシューと出会ってたくさんの優しい人を知りました。みんなが人のために行動していったら、もっともっと優しい場になるんじゃないでしょうか。



石森さん（女子フットサル元日本代表コーチ）

ダイバーシティサッカーの趣旨に賛同し、女子フットサルのトップ選手（1人は日本代表）を連れて参加協力させていただきました。トップチームでプレーする2人からも「みなさん和気あいあいとやっていていい。フットサルを通してみなさんと繋がれて楽しかった。またこういう機会があれば参加したい」といった声が聞かれ、様々な社会的背景をもった人がいること、サッカーを通じて社会がもっと良くなっていくことを感じました。



石森由紀さん／「プリメイラ」コーチ、女子フットサル元日本代表コーチ
藤田実桜さん／島崎美和「プリメイラ」女子フットサルトップ選手

西本さん（ボランティア参加者）

サッカーが好きなんです。サッカーを通じて社会に貢献できたら、自分も幸せだし周りもハッピーじゃないですか。ホームレスサッカーの練習や大会に4年ほど参加しているのですが、ボランティアという感覚はないんです。「同じボールを蹴る仲間」。だから練習で再会できたら嬉しいし、みんなで点を決めたら喜びし負けたら悔しがる。大好きなサッカーを通じて色んな人に出会えて幸せです。これからも、一緒にボールを蹴る仲間として参加したいと思います！



スポーツ交流サロン

スポーツ交流サロンとは

社会的に孤立しがちな方（ホームレス、ひきこもりや不登校、依存症、精神障がい者、生活保護世帯の若者など）が参加できる、スポーツを入り口にしたサロン型交流プログラムです。この場では問題の当事者・支援者の垣根を越えてスポーツを一緒に楽しみ、練習後は食事を取りながら悩み事、将来の事などを対話する“日常的な集い”の場となりました。

開催頻度・参加者数

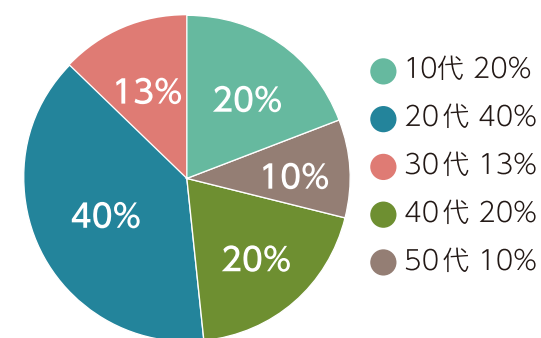
月2回開催、1年間で延べ582人が参加

※支援団体を利用していない当事者（アスペルガー症候群、トゥレット症候群、フリーターや浪人生、外国籍、LGBT、ホームレス経験者など）も、HPやSNSを見て多数の参加がありました。

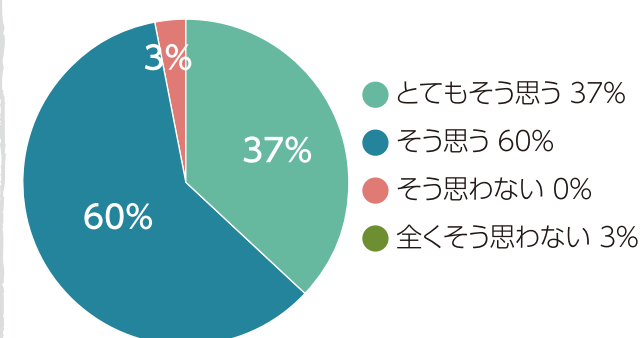
参加者アンケート結果

スポーツ交流サロンでは毎回アンケートを実施

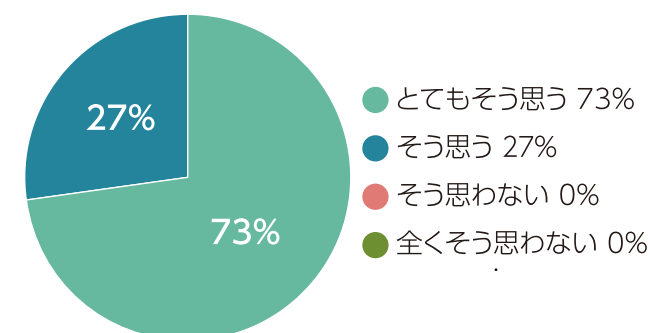
●「参加者の年代」



●「新しい出会いや社会資源を知ることができましたか？」



●「心身はリフレッシュしましたか？」



プログラム例

2017年7月22日(土)

ー参加者：ホームレス当事者やFDA、トモフトなどの利用者や支援者40人ほど

ープログラム：①サッカー交流→②施設訪問し交流勉強会

※FDA：障がいのある人、ひきこもり、生活保護受給者など社会で働きづらさを抱える方々の外出するきっかけづくり、就労支援等を行う団体

※トモフト：千葉県内でフットボールを通じて精神障がい者などが当たり前に暮らせることを目指す団体

①サッカーでの交流

- ・アイスブレイク
(ゲーム前に心身の緊張をほぐすためのウォーミングアップ)
- ・ボールを使っの練習
- ・対戦ゲーム (FDA vs ホームレス当事者、等)
- ・ミックスゲーム

②交流勉強会

- ・川崎市にあるFDAの事務所へ移動し、理事長・成澤さんによるFDAの活動紹介
- ・テーブルごとに自己紹介、「今日の感想」「普段何をしているか」「今後何をしたいか」を対話

参加者の声

- 普段外出することが困難なのでリフレッシュできました。
- 定期的にスポーツが出来る場があるのはとてもありがたいです。
- うつうつとした気分が晴れました。
- FDAの活動が興味深かったです。体調に合わせた仕事があると知りました。

※FDAはスポーツ交流サロン後、11月18日の「ダイバーシティカップ4」にも11人が参加。9月23日の大会事前交流会に9人、大会後の12月23日のアフター交流会にも参加。団体の垣根を越えてつながり、スポーツをする機会となりました。



ダイバーシティカップ④

スポーツ交流サロン参加者の1年間の“晴れ舞台”として、「ダイバーシティカップ」というフットサル大会を開催しました。「ダイバーシティカップ」では、人との繋がりが薄くなりがちな当事者がフットサルを通して心身共に元気になること、また人との出会いを通じて多様性が育まれることを目指しています。2017年11月18日の大会には10チーム、ボランティアや応援者を含め約200人が参加しました。

大会概要

開催日時：2017年11月18日(土) 10:30～18:00

場所：ミズノフットサルプラザ味の素スタジアム

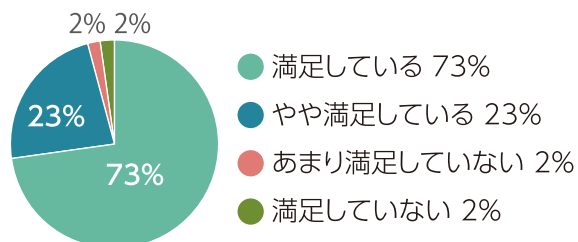
主催：NPO法人ビッグイシュー基金

共催：ダイバーシティサッカーアソシエーション準備委員会

協力：一般社団法人daimon、大塚製薬株式会社、NPO法人府中アスレティックフットボールクラブ

参加者アンケート結果

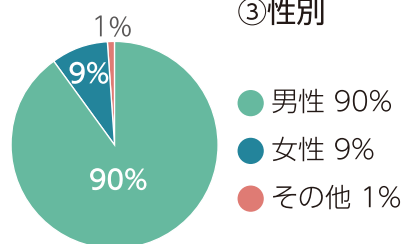
①ダイバーシティカップ満足度



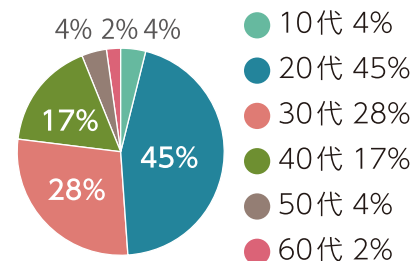
②また参加したいですか？



③性別



④年齢



ダイバーシティカップの特徴とねらい

①チャレンジリーグとエンジョイリーグ

「ダイバーシティカップ」に参加しているチームは、日常的に練習を重ねているチームもあれば、軽度の運動すら難しいチームもあります。そこでダイバーシティカップ4では、とにかく楽しみたいチーム向けの《エンジョイリーグ》、競技性が高い中でチャレンジしたいチーム向けの《チャレンジリーグ》の2つのリーグに分けて開催しました。

エンジョイリーグ

協どうふ 優勝

町田市・相模原市で若者支援を行う2団体で結成した混成チーム

FYO

福島県で不登校の子どもや若者支援を行う団体の混成チーム

オムハビユナイテッド

うつ病等の精神疾患者を対象とした社会復帰支援サービス利用者によるチーム

チームFDA

障がい者の就労支援を行う団体のチーム

野武士と愉快的仲間たち in Tokyo

ホームレス当事者やボランティアによるチーム

チャレンジリーグ

堀江車輻電装株式会社 優勝

障がい者雇用を行う堀江車輻電装株式会社のチーム

FC茗荷谷

ひきこもりの人や発達障がい者などが利用できる居場所を提供する団体から派生したチーム

千葉『共に暮らす』フットボール協会(トモフト)

フットボールを通じて精神障がい等の有無に関わらず共に暮らせる社会を目指す団体のチーム

グレイス・ロード

ギャンブル依存症からの回復施設の利用者チーム

まきばフリースクールF.C

宮城県のフリースクールに通う子ども・青少年によるチーム

参加者の声

●今朝は対戦相手がいっぱいいると感じていたが、今は仲間がいっぱいいるなと思っている ●大会自体があったかく遠方でも声をかけてもらえてありがたい。こういう大会が続いてほしい ●社会で働くためには体力が必要で、通勤だけでも疲れてしまう。社会復帰にむけての体力づくりという面でも、フットサルの練習が役に立っている

②事前交流会と事後交流会

せっかくの出会いが大会の1日だけで終わってしまうのはもったいないという思いから、大会の1か月前と1か月後に交流会を設けました。2回の交流会に合わせて119人が参加しました。

事前交流会



事後交流会



参加者の声

●日頃話さない人と話せて、楽しかったです! ●ミックスゲームで他団体と交流できて楽しかった! ●ある参加者が、「フットサルってこんなに楽しいんですね!」と話してたのが印象的でした。 ●映像を見ながら、大会当日のコトを思い出せて楽しかった! ●もっと出会いを広めていきたいです!

ダイバーシティカップ 4当日の様子



参加チームのネームを手描きで作成



自家用車で荷物を会場に
運搬してくれたボランティア



会場誘導ボランティア



運営サポートボランティア



チーム紹介をする野武士ジャパンの選手たち



ユーモアと個性溢れるチーム紹介



握手して自己紹介



ジャンプしてハイタッチ



アイスブレイクで体と心をリラックス



試合前はがっちり握手



得点し、喜ぶ選手たち



熱いプレーを繰り返し続ける選手たち



ダイバーシティカップ 4 当日の様子



インタビューの様子



試合の合間の談笑



写真撮影ボランティア



チーム内で良かった点を出し合う選手たち

皆さんとても楽しそうで、試合に参加しなくても楽しかったです



様々な背景を持つ人たちが同じ場にいることに、感銘を受けました



チームの垣根を超え、ミックスゲームをする選手たち



女子フットサル日本代表選手も参加



全力応援



参加チームには手作りのカップが贈られた



手作りの横断幕

初めて参加した人たちが、時間を追うごとに、打ち解けて積極的になっていく姿に、ダイバーシティカップの場の力を感しました



閉会式にて、一日の感想を満げに語る選手



手作りのカップを受け取り、お茶目に頭に被る選手

スポーツをしている時は、当事者も支援者もなくフラットな関係で楽しめるということを感しました



福島チームの応援団には特別賞が贈られた



ダイバーシティカップ⁴ 参加チームの声

ダイバーシティカップ4には様々な背景をもった10チームが参加しました。大会をきっかけに合同チームをつくり、練習や日常的な交流が生まれることもありました。今回は「協どうふ」「FYO」の参加者の声を紹介します。

協どうふ

5月に開催された「スポーツ交流サロン／P16-17」に参加した篠原さん。スポーツを通じた、フリースクールに通うひきこもりの若者やホームレス当事者との交流が面白かったといいます。

「自分はひきこもり支援についての勉強やボランティア活動をしていました。でも、サッカーの場では誰もが対等。あの人かひきこもり、私が支援者といった形でなくボール1つあれば仲良くなってしまう。その面白さにハマリ、ボランティアをしていた『ゆどうふ』のスタッフと相談し、フットサルのプログラムを始めました」

ゆどうふは東京都町田市を拠点にフリースペースの運営やひきこもりの人へのカウンセリング、自宅訪問などを行っている団体。ここに(隣市の)神奈川県相模原市を拠点にし、働くことや自立に悩む若者と家族の支援をしている「さがみはら若者サポートステーション」の利用者で、社会的に孤立しがちな若者も加わって

合同での練習が始まりました。

さがみはら若者サポートステーションのスタッフの大成さんは団体を越えて交流することの意味を次のように語ります。「ひきこもっていた若者も個別相談を受けの中で、徐々に自分の心を開くことができるようになります。でも、団体の一步外の社会に踏み出そうとする時、自分の事を話すことが苦手な人が多いんです。だから、サッカーを通じて自分とは所属が異なる人たちと1つのチームになることは、彼らの将来に向けて意味があったと感じています」



活躍した初対面の若者を“胴上げ”（スポーツ交流サロン）



協どうふの旗と集合写真

合同チームでの練習は、スポーツ交流サロンを参考に、チームメイトの名前を呼ぶように心掛け、身体と心をほぐすためのウォーミングアップ、チーム名や大会での目標についても話し合いを重ねたといいます。そして決まったのが「協どうふ」というチーム名。

大成さんが、若者たちに「大会をきっかけに就労に向けても自分なりのチャレンジを1つしよう」と投げかけたところ、就職活動をし実際にアルバイトが決まったメンバーもいたそうです。

協どうふ発足後はメンバーも徐々に増えていき、大会には19人で参加。卒業

生も応援に駆けつけてくれ、結果は3勝1分けで優勝。このことを篠原さんは「非常に嬉しかったです！ずっとチームを信じて練習をやってきてよかった。自分は人を引っ張るタイプではないけれど、みんな練習や運営方法を試行錯誤したことが楽しかった。また次の大会に向けて頑張りたい」と語ってくれました。

ひきこもりや社会的に孤立しがちな若者には、人との関係が希薄になり青春時代の思い出がないという人も少なくありません。ダイバーシティカップの場が、彼らの新たな思い出となってくれればと願っています。



コートの外でも大応援

フットサルチームをつくりたいわけではない

福島県内で活動する複数の団体から結成されたFYO。参加者の背景は、過去に不登校やひきこもりを経験した人、脳性マヒ、障がいを抱えるメンバーなど様々。ダイバーシティカップには2015年から4回連続で参加。遠方からダイバーシティカップに参加する想いをチームリーダーの鈴木綾さんが語ってくれました。

ーなぜ、ダイバーシティカップに福島から参加を？

過去のダイバーシティカップがきっかけで、フットサルや人と交流することに楽しさを感じたメンバーが多くいたのが理由の1つです。もう一つは競技性や単純な競争の場は僕らにとって心地よい場所ではなく、むしろメンバーの中には、そういった環境に傷ついてきた過去を持っている仲間もいます。交流や理解を深める場への要求があったかと思います。

ーダイバーシティカップにはある種の安心感や新鮮さがあるのでしょうか？

ダイバーシティカップに参加する参加者は「ホームレス」「ひきこもり」「うつ病」など様々な背景をもっていますよね。色々な背景はあるけど、それを越えてフットサルを通じてボールを真ん中に人の輪が出来る事が面白いと思っています。いざ大会が始まると、誰が支援者で誰が被支援者か全く分からないというか、気に

もしないあの場がとても心地よいです。普段は支援・被支援の役割があって、けど本当は単純に仲間なんだと実感できる場です。

ーダイバーシティカップでは、FYOらしさを感じる場面が多かったです。

うちのチームは“交流は苦手だけどしたい”というメンバーが比較的多いんです。これまでの挫折経験や苦手だったことに怖さもある一方でチャレンジもしてみたい。そういう意味でサッカーでもチャレンジ、サッカーの場以外でも、他チームの人とミックスゲームやグループトークをする機会があるのは良いですね。加えて4回連続で大会に参加しているので『あそこのチームはサッカー大会なのに、サッカー以外にも新しいことを、どのチームよりも楽しみながら仕掛けている』って感じ取ってもらえたらという想いもあります。これまでにチームメンバーと相談しながら、Tシャツや旗をつくったり、楽器での演奏、うちわ作りなどをしました。



大会でのパフォーマンスの様子

ー遠方からの移動は大変ではありませんか？

僕らにとってダイバーシティカップは、その行き帰りも含めた『旅』です。いつもと違う環境で体調を崩す不安を抱えているメンバーもいます。遠く離れた東京に行くことは、若者たちにとっては大きなチャレンジです。でも、自分を試すことができる良い冒険です。あるメンバーは

「小さなバンジージャンプを繰り返します」と言っていました。これは小さな挑戦を繰り返し、自信をつけていきたいという意味だと思います。長旅なので車の中で大会の思い出を語ったり、これからの夢や過去の出来事などを語り合うのも大事な時間です。次回大会では何をしましょうかね(笑)。



大会にはひきこもりの人のお母さんたちも応援にかけつけてくれた

「ダイバーシティサッカー協会」サポーター募集と設立沿革

～人と自分を認めあえるダイバーシティ社会へ～

ビッグイシュー基金は設立10周年の節目に「ダイバーシティサッカー」の全国展開を応援していきます。社会から排除されたホームレスの人や社会的困難を抱える若者に対しスポーツの機会をつくり、また社会的に孤立した人が他者と出会い、多様な生き方とふれ合って、その価値観を広げ変えていける試みです。このため、2017年7月にはビッグイシュー基金から独立した「ダイバーシティサッカー協会」を設立しました。勝ち負け第一の「競技性スポーツ」ではなく、人と人とをつなぐ「社会性スポーツ」を全国的に展開するダイバーシティサッカーの取り組みにあなたも参加しませんか。

●ボランティアサポーター

ダイバーシティサッカー協会では、ボランティアや参加者を募集しています。
興味をもった方は、下記ダイバーシティサッカー協会までお気軽にご連絡ください。

- ーサッカー練習への参加（初心者大歓迎です）
- ーコーチや審判
- ーホームページ更新や広報
- ーカメラマンやライター
- ー通訳
- ー大会やイベントの運営
- ※プロボノの方も大歓迎です。



イベント運営（受付）



イベントでカメラ撮影



練習への参加

ご連絡先・お問い合わせ先

ダイバーシティサッカー協会（NPO 法人ビッグイシュー基金 内）
電話：070-5550-2647
メール：divsoccer.info@gmail.com

●寄付サポーター

郵便振替：口座番号 00140-9-731143
口座名義 ダイバーシティサッカー協会
お振込の際は、連絡先（お名前、郵便番号、ご住所、電話番号）をご明記ください。
※本口座へのご寄付はダイバーシティサッカー協会へのご寄付となり、ダイバーシティサッカーの取り組みに活用させていただきます。（※認定NPO法人ビッグイシュー基金への寄付ではありません。寄付金控除の対象外です。）

●ダイバーシティサッカー協会設立沿革

- 2003年 5月：有限会社ビッグイシュー日本設立
- 2004年 8月：ホームレスワールドカップ（以下、HWC）・イエーテボリ大会出場
- 2007年 9月：NPO 法人ビッグイシュー基金設立
- 2008年 1月：NPO 法人ビッグイシュー基金のスポーツ・文化活動応援プログラムとしてホームレスサッカーを実施
- 2009年 9月：HWCミラノ大会出場：チーム名「野武士ジャパン」
- 2011年 8月：HWCパリ大会出場
- 2012年 8月：ホームレスサッカー日韓戦開催（ソウル市）
- 2015年 7月：第1回ダイバーシティカップ開催
ダイバーシティサッカー協会設立に向けての委員会を発足
- 2016年 7月：第2回ダイバーシティカップ開催
- 2017年 3月：第3回ダイバーシティカップ開催
- 2017年 7月：ダイバーシティサッカー協会設立
- 2017年 11月：第4回ダイバーシティカップ開催



ホームレスワールドカップ（2009年）



ダイバーシティカップ（2017年）

おわりに

ダイバーシティサッカーが挑戦する互いを認め合う社会

この報告書を読んだ方はどんな感想をもって下さっているでしょうか。「スポーツで多様性なんてつくれるの?」「多様性ってそもそもなんで大事だったっけ?」など、色んな感想を持たれていると思います。1人ひとり感想が違ふことがまず大事ではないでしょうか。

ダイバーシティサッカーは非常に不思議な取り組みです。なぜなら、サッカーというスポーツには勝敗があり多様性とは相容れないものを感じるからです。勝利を目指す以上は上手い・下手が発生します。上手くなければ勝てないですし、上手い人の方が下手な人よりカッコよく見えたりもします。

しかし、ダイバーシティサッカーが面白いのはその生まれた過程です。ホームレスサッカーの10年を超える歴史でチームのなかでメンバーが衝突したり、チームが分裂したことが何度かありました。それは、まさにサッカーの競技性を追求するメンバーと楽しさや居心地の良さを求める人の衝突でもありました。衝突はできれば避けて通れば良いのですが、ここで大事なのは、競技性を求める人も、居心地の良さを求める人もどちらも間違いではないということです。そこから、ホームレスサッカーでは「自分たちは勝つためにチームを結成したのか。何のためにここに集まっているのか」といった会話が生まれました。路上で寝ている“ホームレスのおじさん”が、

まさかサッカーチームのあり方を話し合っているなんて誰も想像していなかったことです。でも、みんな真剣なのです。何度も対話を重ね生まれた答えは「勝ち負けを競うあなたも、居心地の良さを求めるあなたもどちらも間違いではない。一緒にやっていけないか」ということでした。

この話は本来、サッカーに限ったことではありません。人は自分と同じ価値観や生き方をしてきた人と集まる傾向にあります。一方で、自分とは違う価値観や生き方をしている人を見なかったり否定してしまう傾向ももっています。しかし、それでは、分かり合うことはなくマジョリティがマイノリティを排除し、マイノリティがマジョリティを忌避してしまうのではないのでしょうか。競争や成長はとても大切なことです。でも、その速度にしがみつくと疲れ社会から振り落とされてしまう人やその恐怖を感じる人もいるのではないのでしょうか。

ダイバーシティサッカーは、成長と競争、不寛容さへの挑戦ともいえるものになればと願っています。いまはまだ、小さな微かな挑戦ですが、ダイバーシティサッカーが紡いだ物語を偶然で終わらせないようにしたい。多様でやさしい世界であるために、この取り組みを皆さんと一緒に広げていけたらと思います。

ダイバーシティサッカーアソシエーション準備委員
油井和徳

ダイバーシティサッカー活動報告書

2018年3月15日

編集・発行：特定非営利活動法人ビッグイシュー基金

ダイバーシティサッカーアソシエーション準備委員会/ダイバーシティサッカー協会

デザイン：佐藤陽子

事務局：長谷川知広 小林由希 橋新功一

中原加晴 永井悠大 保井力 池田真理子 高野太一 栗原奈津子 川上翔 林直美

ダイバーシティサッカーアソシエーション準備委員会/ダイバーシティサッカー協会

- ・蛭間芳樹（野武士ジャパンコーチ、ビッグイシュー基金理事）
- ・青木弘達（株式会社リヴァ 取締役）
- ・井上英之（慶應義塾大学大学院特別招聘准教授、ビッグイシュー基金理事）
- ・鈴木直文（一橋大学大学院 准教授）
- ・日比野克彦（アーティスト、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長）
- ・星野智幸（作家）
- ・油井和徳（NPO法人山友会理事）

（連絡先）特定非営利活動法人ビッグイシュー基金

〒162-0065

東京都新宿区住吉町 8-5 シンカイビル 201 号室

TEL：03-6380-5088

FAX：03-6802-6074

H P：http://www.bigissue.or.jp

MAIL：tokyo@bigissue.or.jp

平成 29 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業